

大和川付け替え物語

中甚兵衛らが、大和川付け替えを幕府に嘆願した

2万年前の大和川は、生駒山系を抜けて現在の柏原市付近で石川と合流すると、そこから北へ流れ、河内湖で淀川と合わせて上町台地の北で海へ注いでいた。河内湖は次第に土砂で河内平野へと変わるが、**そこには常に洪水の危険がつきまとっていた。**

古くは、飛鳥、奈良時代から洪水の記録があり、江戸時代になってからでも、元禄年間までの約80

年の間で十数回もの洪水が河内地方を襲っている。大和川は、自らの堆積作用により天井川となっていたため、ひとたび洪水が起こると、その被害は計りしれないものがあり、洪水は河内地域だけではなく大坂市中にまで及ぶこともあった。

こうした被害をなくすため、1657年（明暦3年）ごろ、河内地域の農民から抜本的な大改革案が、幕府に嘆願された。大和川を、その石川との合流点付近から西に向け、直接、住吉・堺の海へ流れこむように付け変えるという案で、**中心的役割を果たしたのが、今来村（現東大阪市）の庄屋、中甚兵衛であった。**

このアイデアそのものは、古くからあったようで、奈良時代の和気清麻呂は、大和川の一部を、今の天王寺公園の南側に通して大阪湾へ流そうと計画し、多くの予算と人夫約23万人を使ったが、完成には至らなかったといわれる。

中甚兵衛たちが幕府に嘆願した付け替え案に対して、付け替え予定地にあたる村々は激しく反対、逆に幕府に対して、付け替え反対の嘆願を行い、河内を二分する様相となっていた。幕府はたびたび現地を検分し、付け替え以外の解決策も検討されて、付け替え決定まで、実に50年もの歳月を要するのである。

ついに幕府は大和川付け替えを決定した

1683年（天和3年）幕府の4回にわたる実況検分の結果、「付け替えは取るに足りない愚作」とする河村瑞賢ずいけんの意見を採用し、「付け替え廃止」を決定、瑞賢の意見に基づく下流の改修工事を採用した。ところが改修工事が完成した直後の1700年（元禄13年）以降も洪水は続発したのである。

ここに至って、ついに幕府は方針を転換、1703年（元禄16年）に行われた第5回目の実況検分の後、大和川の付け替えを正式に決定した。時に甚兵衛65歳の秋のことである。



付替え工事は翌1704年（元禄17年）2月に、石川との合流点付近、現在の柏原市役所のあたりから西へ、延長14km、幅180mの新しい川を作る工事が開始された。幕府の公儀普請とされたが、大名も御手伝普請として工事の助成を命じられた。工事は同じ年の10月に完成、着工後8カ月という超スピード工事だった。工事の費用は約7万7千両（2百億円から3百億円）うち幕府の負担は半分の3万7千両であったが、旧川筋の新田開発の入札代金が同額だったため、幕府の負担費用は相殺された。工事従事者は延べ約286万人といわれる。

こうして大和川の本流は付替えられたが、元の流れの一部は農業用水として残されることとなった。長瀬川や玉串川、平野川などがそれで、新しい大和の堤防から水を引き入れるための樋門が設けられた。これは今も活用されている築留樋や青地樋がそれで、築留樋は長瀬川、玉串川沿いの78カ村に、青地樋は平野川沿いの21カ村に通水するために設けられた。現在柏原市の大和川付替え樋の前の築留二番樋は国の登録有形文化財に指定されている。

大和川付替えで河内の国はどう変わったのか

大和川付替え工事終了後、旧川筋、約1060町歩（1050ヘクタール）が新田として開発された。他方、新川筋となった農地（潰れ地）は約270町歩（約267ヘクタール）だった。現在地名として残る鴻池新田も当時開発された新田の一つ。これらの新田では綿が栽培された。綿はその後江戸期を通じて河内の主要作物として生産され、最盛期には10600町歩以上もの面積で栽培されている。しかし、明治以後、安価な外国産の綿に押され、現在では、河内地方で産業としての綿作りは行われていない。

付替えによって旧川筋の慢性的な洪水被害は解消されたが、その一方で、新川筋の左岸一帯が排水不良地となり、堺を中心に、現在までの300年間で10回余りの洪水が発生している。昭和57年の水害でも、大和川左岸を中心に被害が出たことは記憶に新しく、現在も江戸時代の人々が抱いた水への危険は続いているのである。

中甚兵衛は、付替え工事の完成後、深野川筋の中村新田や新開池の中新田などの開発に関わり、その後67歳の時に浄土真宗の大坂津村御坊で剃髪し、仏門に入った。剃髪の理由は分からないが、洪水などで命を落とした多くの人々に思いを寄せていたのではないかといわれる。そして享保15年（1730）、92歳でこの世を去った。その12年後に妻の妙春も没し、二人の墓は大谷本廟西大谷墓地に作られた。

参考資料 大和川付け替え物語、中家文書から見た中甚兵衛の生涯
（以上 柏原市立歴史資料館）